旭日、遥かなり５

横山信義
Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の→キーを押して下さい。
もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

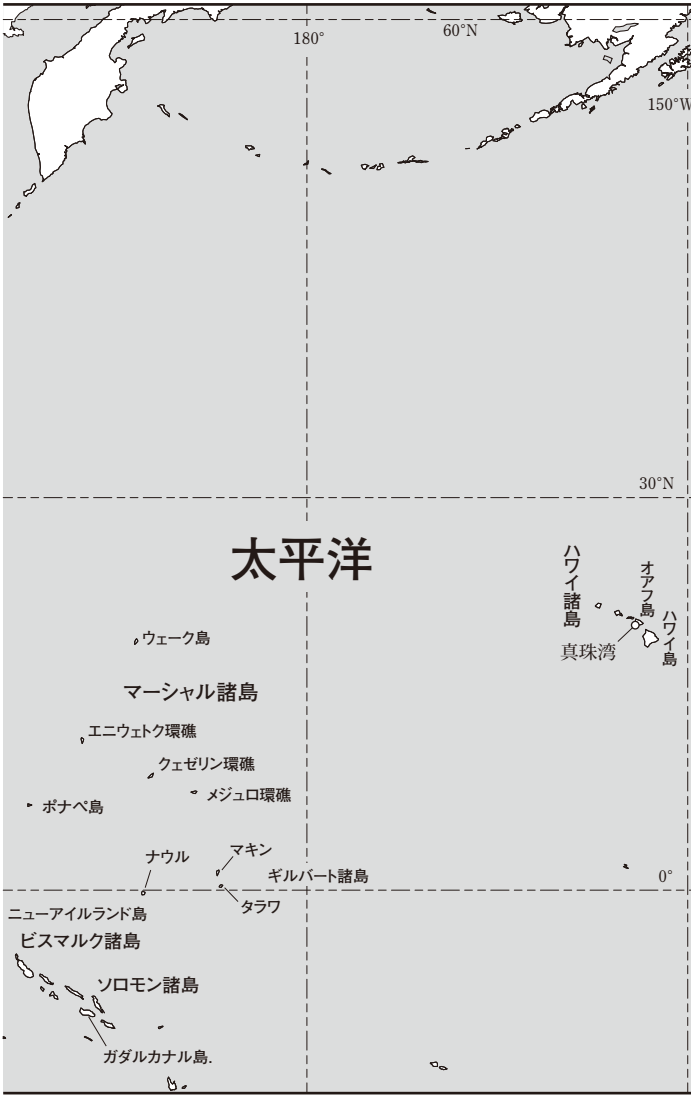
●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみて下さい。

●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉　画　高荷義之
地図・図版　安達裕章
編集協力　らいとすたっふ

目次

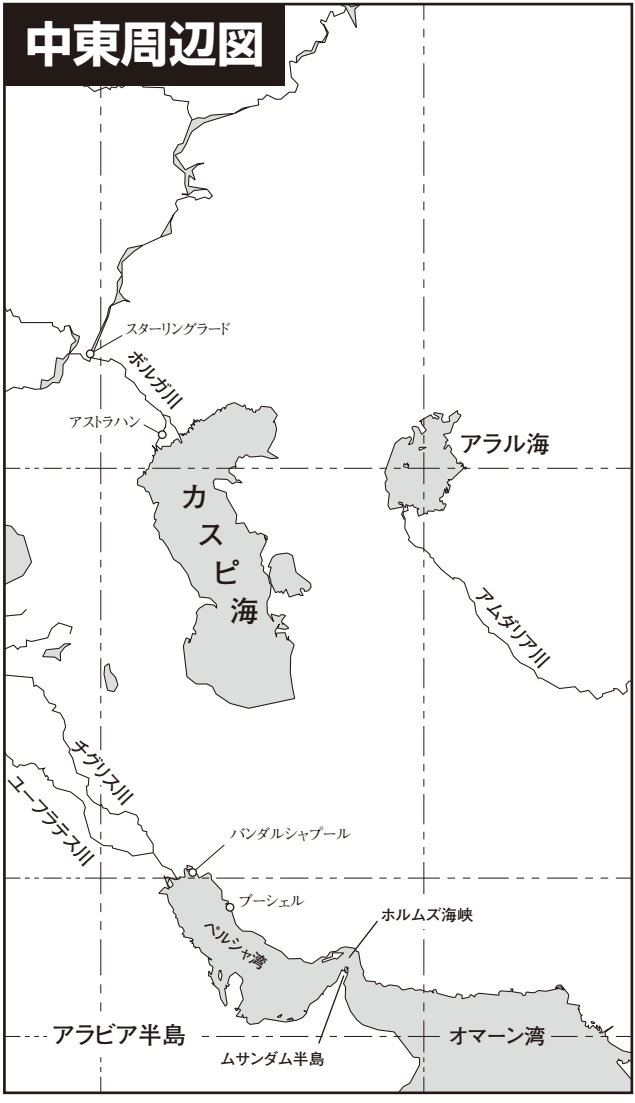
第一章　第二次ギルバート沖海戦　9
第二章　反攻の嚆矢（こうし）　49
第三章　崩（くず）れゆく国　101
第四章　巨艦集結　137
第五章　吼（ほ）える巨砲　171
第六章　鋼鉄の胎動（たいどう）　235


180°
60°N
150°W
30°N
太平洋
ハワイ諸島
オアフ島
ハワイ島
真珠湾
ウェーク島
マーシャル諸島
エニウェトク環礁
クェゼリン環礁
メジュロ環礁
ポナペ島
ナウル
マキン
ギルバート諸島
タラワ
0°
ニューアイルランド島
ビスマルク諸島
ソロモン諸島
ガダルカナル島.

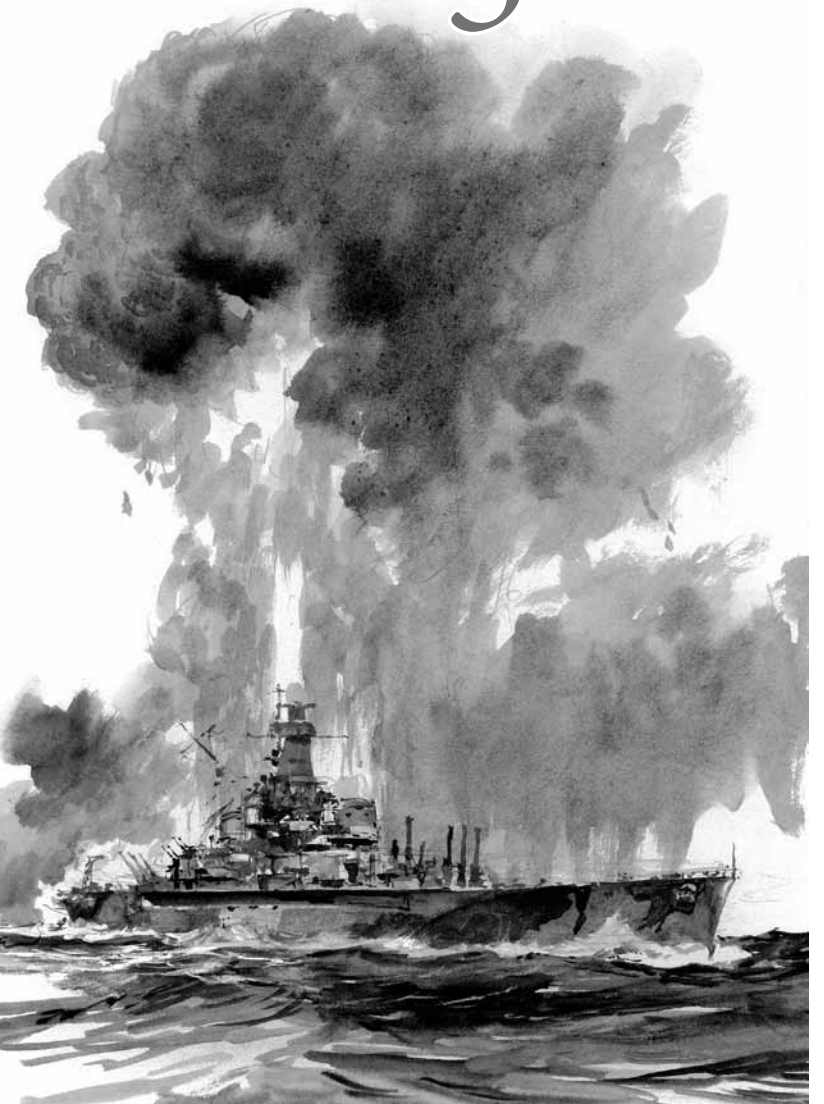
西部太平洋要図

150°E
120°E
ポリショエ・ゴロウストノエ
バイカル湖
ウスチ=バルグジン
イルクーツク
オイムル
ポツリスコエ
バブシュキン
リストビャンカ
バイカリスク
呉
東京
香港
フィリピン
マニラ
マリアナ諸島
サイパン島
グアム島
トラック環礁
パラオ諸島
マレー半島
シンガポール
ボルネオ島
スマトラ島
ジャワ島
オランダ領東インド
(蘭印)
カピエン
ラバウル
ニューギニア島
ニューブリテン島

中東周辺図


スターリングラード
ボルガ川
アストラハン
カスピ海
アラル海
アムダリア川
チグリス川
ユーフラテス川
バンダルシャプール
ブーシェル
ペルシャ湾
ホルムズ海峡
アラビア半島
ムサンダム半島
オマーン湾

旭日、遥かなり 5



第一章　第二次ギルバート沖海戦

1

タラワ環礁の礁湖からは、黒煙が立ち上り続けていた。

赤い光が、沖合いから見えている。

昼間に来襲した一式陸攻の爆撃を受け、被弾した輸送船が、燃え続けているのだ。

タラワの北、二九〇浬の地点にあるメジュロ環礁には、日本軍の航空基地が置かれていたが、同地は九月三日のタラワ沖海戦（ギルバート沖海戦の米側公称）に先立ち、空母「ワスプ」の艦上機が叩いた。

メジュロの飛行場が復旧され、機能を回復したとの情報はない。

おそらく、メジュロよりも更に北――マーシャル諸島の中心地であるクェゼリン環礁の航空基地から来襲したのだろう。

「空襲の被害集計が出ました。輸送船一隻沈没、二隻大破です。被弾した輸送船の一隻は、油脂を運んでいたため、消火に手間取っているとの報告です」

第一〇巡洋艦戦隊旗艦「シカゴ」の艦橋に、参謀長ロバート・ブロス中佐が報告を上げた。

CD10は、第二一任務部隊に所属しており、第九巡洋艦戦隊や駆逐艦二五隻と共に、輸送船団の護衛に当たっている。

タラワ攻略に当たった第一海兵師団二万二〇〇〇名と補給物資を運んで来た輸送船五四隻は、全て礁湖に入泊しており、荷下ろしの作業中だ。

海軍設営隊が飛行場を設営し、航空部隊の第一陣がタラワに進出するまでは、護衛部隊もこの地に留まる必要があった。

「日本軍の守備隊は？」

「海兵隊からの報告では、ほぼ掃討を終えたようです。一部の兵が内陸のジャングルに逃げ込みましたが、二、三日中には一掃できるだろう、とのことでした」

CD10司令官ドナルド・コーウィン少将の問いに、ブロスは淀みなく返答した。
「タラワの守りに就いていたのは、軽武装の歩兵が一〇〇〇名程度だったそうです。戦車はおろか、装甲車すらなく、陣地の構築もほとんど行われていなかったとか」
「最前線にしては、守りが手薄だな」
「もともと日本軍には、タラワに本格的な航空基地を建設するつもりはなかったと思われます。先のタラワ沖海戦の際、同地を攻撃した『レキシントン』の艦上機隊は、タラワに展開していた航空機は水上機のみだったと報告しています」
情報参謀のジャック・ランザ少佐が言った。
「タラワは、洋上監視用の小規模な基地でしかなかったということか」
「マーシャル・ギルバート方面における日本軍の最重要拠点はクェゼリン環礁です。クェゼリンが砦、タラワはその前哨地という位置づけでしょう」
「彼らがさほど重視していなかった基地が、我が合衆国にとっては、反攻の拠点となる。前哨地が砦を陥落させるわけだ」
コーウィンはニヤリと笑った。
太平洋艦隊は、九月三日のタラワ沖海戦で空母二隻を失って退却したが、これは一時的な後退でしかなかった。
海戦の間、後方で待機していたTF21は、日本艦隊が本土に引き上げるのを待って、この日――九月一五日、タラワの攻略にかかったのだ。
一旦、日本本土に引き上げた艦隊が、慌ててギルバート諸島に駆けつけようとしても、簡単にはいかない。
燃料、弾薬の補給と、日本本土からギルバート諸島までの航程を考えれば、どれほど急いでも一〇日はかかる。
それまでに、合衆国はタラワの攻略と飛行場の設営を終え、航空部隊を進出させている。

タラワ沖海戦は、戦略的には決して敗北ではなかった。

空母二隻の犠牲と引き替えに、タラワ攻略の作戦目的を達成したのだから、むしろ勝利と言っていい。

気になるのは、日本軍の水上部隊の動きだ。

情報では、クェゼリン環礁に巡洋艦を中心とした有力な部隊が待機しているという。

この部隊が、タラワに駆け付けて来る可能性は高いと見なければならない。

今日から明日にかけてが、タラワを巡る戦いの山場だ。

時刻は、現地時間の二二時一二分。

ＴＦ21は現在、二手に分かれ、タラワの警戒に当たっている。

ＣＤ10が所属する第二一・二任務群（TG 21.2）の現在位置は、環礁北端に位置するバイリキ島よりの方位三〇〇度、一二浬。

重巡「シカゴ」「チェスター」「ペンサコラ」に、第三三駆逐隊（DDG 33）のリバモア級駆逐艦五隻が付き従っている。

重巡三隻は、合衆国海軍の巡洋艦の中では古いタイプに属するが、「シカゴ」「チェスター」は二〇センチ三連装砲三基九門、「ペンサコラ」は二〇センチ三連装砲、連装砲各二基で合計一〇門。

火力は、最も新しいニュー・オーリンズ級に引けを取らない。

巡洋艦一個戦隊程度の相手なら、勝算は充分あるとコーウィンは考えていた。

「来るなら来い、ジャップ！」

コーウィンが敵愾心を込めて呟いたとき、艦橋見張員の報告が上げられた。

「上空に爆音！　機数二機ないし三機！」

「『魔法使い』より全艦。『魔女が来る』。繰り返す。『魔女が来る』！」

コーウィンは咄嗟に、ＴＦ21の全艦に警報を発した。

機数から判断して、上空に飛来した不明機は、敵の観測機である可能性が高い。

予想された通り、敵艦隊が夜襲をかけて来たのだ。

「観測機発進！」

「シカゴ」艦長ハワード・ボーデ大佐が飛行長ビリー・トレント大尉に命じたとき、上空から青白い光が降り注ぎ始めた。

光量はさほど大きくないが、二基の二〇センチ三連装砲塔や艦首の揚錨機が、はっきり見えている。

「後部見張より艦橋。『チェスター』の上空に吊光弾を確認。今、『ペンサコラ』の上空でも点灯しました！」

後部指揮所から、新たな情報が報される。

艦橋の後ろから、射出音が届く。

観測機のヴォートOS2U〝キングフィッシャー〟が、夜空に向けて放たれたのだ。

「ジャップはどこだ⁉」

「砲術、敵の発見急げ！」

コーウィンの苛立った叫びを受け、ボーデが砲術長ロニー・メイスン中佐に命じた。

射撃指揮所も、見張員も、まだ敵艦発見を報告していない。このままでは、先制攻撃を受ける。

「どこだ、ジャップ！　どこに――」

コーウィンの声が、途中で止まった。

「シカゴ」の左舷前方に、多数の光がほとばしったのだ。

「敵艦、左三〇度、七〇〇〇ヤード（約六四〇〇メートル）！」

「敵は重巡四！　その前方に駆逐艦を確認！」

メイスンが二つの報告を上げ、

「『ウィザード』より『精霊』。目標、左三〇度の敵艦。砲撃始め！」

コーウィンが叩き付けるように下令した。

「艦長より砲術。主砲、左砲戦。目標、敵重巡一番艦。砲撃始め！」

ボーデがメイスンに下令し、「シカゴ」の前甲板で、

主砲塔が左に旋回した。
その砲口に発射炎がほとばしるより早く、夜気が激しく振動した。
来る！　――コーウィンが直感したとき、「シカゴ」の前方に多数の水柱が奔騰した。
艦底部から爆圧が突き上がり、「シカゴ」の艦首が水柱に突っ込む。海水が揚錨機や甲板に落ちかかり、朦気が立ち込める。
敵の第二射と「シカゴ」の第一射が、ほぼ同時だった。
「シカゴ」の前甲板に火焔がほとばしり、発射の反動が艦を貫き、全長一八三メートル、基準排水量九三〇〇トンの艦体を震わせた。
「『チェスター』射撃開始」
「『ペンサコラ』射撃開始」
後部見張員が、僚艦の動きを報告する。
再び敵弾の飛翔音が迫り、艦の周囲で大気が鳴動した。
「シカゴ」の前方に、再び多数の水柱が上がった。
発射炎のそれとは異なる閃光が前甲板に走り、真っ赤な火焔が奔騰した。
被弾は、一発だけではない。
直撃のたび、甲板の板材が空中に噴き上げられ、揚錨機が吹き飛ばされる。
第一砲塔にも一発が直撃し、砲身三門のうち二門が吹っ飛ぶ。砲塔の天蓋が大きくまくれ上がり、その下から大量の黒煙が噴出する。
直撃弾は、「シカゴ」の前部に集中したのだ。
「シカゴ」の射弾も着弾したはずだが、「命中」の報告はない。初弾は空振りに終わったのだ。
「第一砲塔と前甲板に被弾。消火急げ！」
ボーデがダメージ・コントロール・チームのチーフに下令したとき、左前方にこれまでのものよりも強烈な閃光がほとばしった。
光の中に浮かび上がった敵艦のシルエットが、コーウィンの目を射た。

型までははっきり分からないが、艦橋はかなりのヴォリュームを持つようだ。高雄型――妙高型と共に、日本海軍が世界に誇る重巡かもしれない。

「シカゴ」も第二射を放つ。

健在な第二砲塔が、二〇センチ砲三門の砲口に発射炎を閃かせ、爆風が火災煙を吹き飛ばす。

「シカゴ」は、まだ挟叉弾を得ていない。

にも関わらず、メイスンは斉射に踏み切ったのだ。

発射の反動が収まるのと入れ替わるように、敵弾多数の飛翔音が聞こえ始めた。

轟音が「シカゴ」の頭上を圧し、艦全体を包んだ直後、先の被弾時とは比較にならない衝撃が襲いかかった。艦橋内の全員が弾け飛び、内壁や海図台、伝声管に叩き付けられた。

敵弾が命中する衝撃に、「シカゴ」の艦体が激しく震え、悲鳴じみた大音響を発した。フックやボディブロウを続けざまに打ち込まれたボクサーが、苦悶しているかのようだった。

衝撃が収まったところで、コーウィンはのろのろと身体を起こした。

直後、大きくよろめき、海図台にもたれかかった。

「シカゴ」は、前のめりに大きく傾斜しているのだ。

一変した艦の前部が、艦橋の窓から見える。

健在だった第二砲塔は、第一砲塔同様無惨な姿に変わり、絶え間なく黒煙を噴き出している。

艦首は大きく断ち割られた上、海面付近まで沈下し、周囲では海水が激しく泡立っている。

直撃弾は「シカゴ」の前部に集中し、主砲塔を叩き潰した上、艦首を破壊したのだ。

「機関長、両舷停止！　艦首より、浸水が発生している！」

コーウィンは艦内電話に飛びつき、機関長ロバート・フィルモア中佐に命じた。

本来であれば、艦長を通じなければならないが、今は危急の時だ。命令系統の一時的な無視も止むを得なかった。

――「シカゴ」の行き足が止まったときには、日本艦隊の砲火は、「チェスター」と「ペンサコラ」に向けられている。

「チェスター」艦長チャールズ・セシル大佐は、「シカゴ」が落伍した直後、

『ペンサコラ』に信号。『我に続け』」

「取舵一杯。針路二五五度！」

「艦長より砲術。目標、敵重巡一番艦！」

と、続けざまに下令した。

砲戦開始の直前に発進した観測機が、

「敵針路二五五度」

と報告して来たことや、発射炎の中に浮かび上がった敵艦のシルエットから、日本艦隊がT字を描いていることを悟ったのだ。

敵弾が唸りを上げて飛来する中、「チェスター」と「ペンサコラ」はしばし直進を続ける。

周囲の海面は、至近弾によって激しく沸き返り、爆圧が艦底部を突き上げる。

敵を射界に収めている第一、第二砲塔は砲撃を繰り返す。発射のたび、砲声が殷々と海面を渡り、鋼鉄製の艦体が反動に震える。

敵弾が次々と落下し、水柱が林立する中、「チェスター」の艦首が左に振られる。

左前方に見えていた発射炎が右に流れ、右前方から右正横へと移動してゆく。

艦が直進に戻るより早く、最初の直撃弾が襲って来た。

艦の右舷側に二本、左舷側に一本の水柱が奔騰すると同時に、衝撃が二度、立て続けに襲い、鋼鉄製の巨体が激しく震えた。

それが収まらぬうちに、新たな衝撃が襲いかかり、艦橋の後方から何かが壊れるような音が届いた。

「第三砲塔損傷！」

「射出機被弾！」

射撃指揮所とダメージ・コントロール・チームから、被害状況報告が上げられる。

「おのれ……！」
セシルは唇を噛み締め、呻き声を漏らす。
回頭によって同航戦に持ち込むつもりだったが、その前に主砲塔一基を破壊され、火力の三分の一を奪い去られたのだ。
敵が新たな射弾を放つ前に、「チェスター」は直進に戻った。
健在な第一、第二砲塔が、待ちかねていたかのように発射炎を閃かせ、砲声が轟いた。
ほとんど同時に、右舷側海面に多数の閃光がほとばしり、敵艦のシルエットが浮かび上がった。
彼我の射弾が上空ですれ違い、夜気を震わせる。
敵弾の飛翔音が迫り、轟音が艦を包む。
新たな衝撃が「チェスター」を襲い、基準排水量九二〇〇トンの艦体が激しく振動した。
被害状況報告が届くより早く、敵重巡が第二斉射を放ち、閃光が艦影を浮かび上がらせた。
「チェスター」も、第一、第二砲塔で反撃する。
右舷側に発射炎がほとばしり、発射の反動を受けた艦体が震える。
轟音と共に、敵弾が襲って来た。
「チェスター」の左右両舷に多数の水柱が奔騰し、直撃弾炸裂の衝撃が続けざまに走った。
艦体や上部構造物を破壊する一撃と、艦底部を突き上げる爆圧に、艦は発作を起こしたように震え、悲鳴じみた叫喚を放った。
発射の反動を受けた艦体が、僅かに左へと傾ぐ。
「チェスター」の射弾も着弾しているはずだが、砲術長ジャック・オリビエ中佐から「命中！」の報告はまだない。これまでの砲撃は、ことごとく空振りに終わっている。
「せめて一矢……！」
セシルが呟いたとき、敵重巡が第三斉射を放った。
「チェスター」も、反撃の射弾を放つ。
何発もの直撃弾と、至近弾の爆圧に痛めつけられながらも健在な二基の主砲塔が、轟然たる砲声と共

に、六発の二〇センチ砲弾を叩き出す。
敵弾多数の飛翔音が、みたび「チェスター」の頭上から迫った。
セシルが不吉な予感を覚えたとき、艦橋内に黒い塊が飛び込み、全世界が真紅に染まった。
敵重巡の一、二番艦から、続けざまの斉射を浴びせられた「チェスター」は、全ての主砲を爆砕された上、丈高い三脚檣を根こそぎにされている。
上甲板や艦内の通路では炎がのたうち、噴出する黒煙は艦の半ば以上を覆っている。
機関はまだ生きており、艦を前に進ませていたが、速力は大幅に低下しており、いつ行き足が止まってもおかしくなかった。
CD10の三番艦「ペンサコラ」は、「チェスター」の後方に取り残されている。
上部構造物の被害は比較的少ないものの、機関は完全に停止しており、艦は右舷側に大きく傾斜した状態だ。
日本艦隊の射弾は、舷側を貫通して缶室に突入し、「ペンサコラ」の心臓部を粉砕したのだ。
艦の周囲には、どす黒い重油が広がりつつある。
既に「総員退去」が命じられ、上甲板からは、乗員が次々と海面に身を躍らせていた。

2

短時間の戦闘でCD10の重巡三隻を戦闘不能に陥れたのは、クェゼリン環礁より出撃した「挺身攻撃隊」——第四艦隊隷下の水上砲戦部隊だった。
独立旗艦の高雄型重巡「鳥海」と第六戦隊の重巡「青葉」「加古」「衣笠」に、第七水雷戦隊を加えた編制だ。
「鳥海」は開戦時、南遣艦隊の旗艦としてマレー作戦の支援に従事していたが、開戦の翌日に生起したマレー沖海戦で、英国が誇る最新鋭戦艦「プリンス・オブ・ウェールズ」、巡洋戦艦「リパルス」と砲火

を交えている。
「鳥海」はこのときの戦いで損傷し、内地に回航されたが、修理完了と同時に第四艦隊に配属され、中部太平洋の守りに就いた。
第六戦隊は、四月のマーシャル沖海戦に参加した後、内地に戻って修理と整備を行い、「鳥海」と共に第四艦隊の指揮下に入った。
第七水雷戦隊は、長良型軽巡の「由良」を旗艦とし、第三水雷戦隊の隷下にあった第一一、二〇両駆逐隊の吹雪型駆逐艦七隻を異動させている。
開戦時、第四艦隊司令長官は井上成美中将が務めていたが、マーシャル沖海戦終了後、井上は海軍兵学校長に異動し、後任には海兵同期の鮫島具重中将が任ぜられた。
タラワの第六三警備隊より、
「敵艦船多数接近。『タラワ』上陸ノ公算大ナリ」
との第一報が届いたとき、第四艦隊司令部は挺身攻撃隊に対し、直ちにタラワへの出撃を命じた。
指揮は鮫島が自ら執るべきところだが、第四艦隊はマリアナ、トラック、マーシャル、ギルバートといった広大な海域の警備を主任務としている。
鮫島が艦上で戦死するようなことがあれば、中部太平洋は指揮官不在となり、防衛態勢に混乱を来す。
このため挺身攻撃隊の指揮は、第六戦隊司令官五藤存知少将に委ねられていた。
「敵二、三番艦、行き足止まりました！」
「七水戦司令部より報告。『敵駆逐艦二隻撃沈、一隻撃破。敵二隻ハ遁走セリ』」
「うむ！」
二つの報告を受け、五藤は満足の声を漏らした。
「敵艦隊見ゆ」の第一報が入った後、敵に気づかれぬよう丁字を描き、距離を六四〇〇メートルまで詰めたところで砲撃を開始した。
結果、戦闘の主導権は終始日本側が握り、一方的に叩きのめすことができたのだ。
こちらの被害は、「青葉」と「加古」に一発ずつ

が命中し、上甲板や高角砲を損傷した程度だ。
両艦とも、戦闘・航行に支障はない。挺身攻撃隊は、まだ充分力を残している。
「隊列は乱れていないか？」
「七水戦、隊列の乱れありません。六戦隊も、乱れなしとの報告です」
五藤の問いに、首席参謀貴島掬徳中佐が返答した。
第六戦隊の旗艦は「青葉」だが、「鳥海」は内地で修理した際、通信機を最新のものに換装し、旗艦としての能力が向上している。
このため五藤は、出撃前に将旗を「青葉」から「鳥海」に移していた。
索敵機の情報によれば、敵の輸送船は環礁南西部のベチオ島と南東部のボンリキ島周辺に集まっている。
ベチオ島の西側から環礁の南側に回り込み、環礁越しに船団を砲撃すればよい、と五藤は考えていた。
海軍時計で時刻を確認し、五藤は力を込めて下令した。
「艦隊針路一八〇度。発動一九四五（日本時間。現地時間二二時四五分）。タラワの敵輸送船団を撃滅する！」
軽巡洋艦「由良」艦長佐藤四郎大佐は、海軍時計の針が一九時四五分を指すと同時に、
「取舵一杯。針路一八〇度！」
を下令した。
「取舵一杯。針路一八〇度！」
航海長矢崎繁少佐が操舵室に指示を送る。
「由良」はしばし直進を続けた後、艦首を大きく左に振った。
これまで、艦橋の死角に隠れていた後方の艦――七水戦隷下の吹雪型駆逐艦や、旗艦「鳥海」、六戦隊の重巡三隻が、左舷側に見え始めた。
「後部見張、後続艦の動き報せ」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はＰＤＦ
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。